

健康文化

## 藪蚊のいる文化生活

高田 健三

それは将に息を呑むほどの美しい眺めであった。ノルウェー屈指の漁港の一つ、オーレスンという港町を眼下に見下ろす岡の上に立った時のことである。200メートルほどの岡の上にある展望台の真下に展開する街並みは、島一杯に広がっていて、家々の色が創り出す色調が街の東西を取り囲むノルウェー海の紺碧の色と絶妙のコントラストをなして浮かび上がっているのである。スペインやイタリアの街のたたずまいの魅力は、明るいかーキ色の屋根と白い壁にあるが、オーレスンの街の色彩は、それとは違った色温度を持っているのである。原色のどぎつさはなく、パステル調の穏やかで温かな色調という表現が似合っている。

展望台から下ってきて、街の中に足を踏み入れると、不思議な優しさのある街並みの雰囲気に取り込まれてしまった。港に足を運び波止場に立った時、港を隔てて望んだ街の景色は、再び思わず声の出るほどのものであった。家々の色彩といい、造形といい、両手の指でつくったトリミング枠を、どの方向に向けても画になるものであった。太陽がいっぱいのニース等地中海沿岸の街々とも一味も二味も違うのである。世界には100万ドルの夜景と銘打った見所があらこちらにある。香港、サンフランシスコ等の港町、ドナウ川の宝石といわれるブダペストなど枚挙にいとまないが、それらは照明灯が描く幻想美といったところであろうか。しかし、太陽の光が描き出す美しさには勝てない。

ノルウェー指折りの漁港とはいえ、この街の人達がこれ程までの街造りをした原点は何だったのか、気になるところであった。たまたま後になって街の歴史を読んで、その謎を知ることになった。時は遡って1904年、街は大火で殆ど焼失する。当時はヨーロッパでアール・ヌーボーが芸術界を席卷している時であった。その流れを受けてドイツ、オーストリア等で盛んであったユーゲント・シュティル(青春様式)と呼ばれる建築様式を、オーレスンは街の再建プランとして取り入れることにしたというのである。その結果、全体がアール・ヌーボー様式の街並みが出現したのである。私は寡聞にして、他にこのような街を知らないが、それ程大きくない港町とはいえ、当局者が町造りの基本概念を、ドイ

ツなどで斬新な芸術感覚を身につけた建築家達に委ねること自体、大変な英断である。また、その計画を受け入れた街の人達の決断は大変なものだったと思われる。いくらフランス中心に広がっていた芸術思想といえども、北極圏に遠くもないノルウェーの一漁港の街にどれ程知られていたのであろうか。彼らのどこにそんな先進性があったのか、もう一つ理解できなかった。

しかし、ノルウェー人の祖先がバイキングであることに思いを巡らせば、有り得ないことではないと思うに到った。バイキングは並外れた冒険心のため、略奪をほしいままにする海賊との印象が一般的であるが、その実、彼らは商才も身につけた政治家であり、心豊かな詩人でもあり、他方、流麗美を誇るバイキング船を建造した芸術家であり、技術屋なのであった。コロンブスより500年程も前の、10世紀末頃に、既に北米大陸(カナダ)を発見したほどの行動力の持ち主であることを思えば、オーレスンの人達の先進性は何も不思議ではなくなってしまう。しかも、それ以来100年近くの歴史が流れた今も、街全体にそのたたずまいが色濃く残されていることは、何事にも熱しやすく冷めやすい日本人の感覚では容易に理解できないのではないだろうか。聞くところによると、建築条令で建物の高さ、デザイン等に一定の制限があるというが、古いからだけではなく、よきものを守るというところに、街の人達の、心のふるさとを大事にするという優しさと誇りが伺える。一見、保守的に見えて日常的には結構合理的なところは、バイキングのDNAに刻まれて受け継がれたものというほかはない。いつも電灯をこまめに消す日本人の留学生が、ノルウェーのクラスメイトに小言を言われていたという。この国では、有り余る水力で発電するため、電気料金がきわめて安く、点滅させることで高価な電球の寿命が縮むからだというのである。

パリーの街並みが、いつ見ても変わらないのも、街の景観を保存する条例によって守られているからだという。建て替えの場合でも、通りに面した外壁だけは、そのまま残して使用しなければならないという。稀に、残された壁が工事中にバランスを失って倒壊する事故も起こるというから、その徹底ぶりに、我々日本人は驚かされるばかりである。もちろん、公費からの補助があるとはいえ、随分手間のかかることであるが、それだからこそパリーは芸術の都であり続け、世界中からの観光客を引きつける魅力を持っているのであろう。もし、第二次世界大戦の後の復興の時、パリーが超高層ビルの都市に変貌していたとしたらどうであろうか。恐らくニューヨークのコピーということで今のような魅力は失われていたに違いない。

近頃、我が国でも街並み保存の気運が高まり、古き時代の優れた文化遺産を

守る試みがなされている。角館市や金沢市、松阪市、杵築市などの武家屋敷はその例であるが、いずれもほんの一区画に過ぎない。私の好きな木曾路には、昔の宿場町が丸々どうにか保存されているところもあるが、余り名の知られていない中にもなかなか情緒のある宿場町もある。しかし、そんな町を歩くと、ちらほらとアルミサッシの玄関戸や窓枠の入った家が目について、折角の雰囲気壊しているのは残念である。土地の人に聞くと、その家人は、他の町に勤めに出ている人達で、町並み保存には積極的な協力が得られないという。今日この頃では、木製の玄関戸や窓枠は、アルミ製に比べて高価につくから、当然のことかもしれない。石の文化のヨーロッパと異なり、木の文化の我が国では、パリー式の壁面残し工法というわけにもいくまい。いずれにしても我々自身の意識改革はもちろんのこと、国や地方自治体が物心両面で積極的にサポートしなければ、我が国の文化財の運命はそう長くないように思える。

全国的にも有名な飛騨白川郷の合掌造り村落が、ユネスコの世界遺産に指定されたのを期に訪ねることにした。村に近づくとつれ、車のフロントガラスの向こうに合掌造りが見えた時、雪深き山里によくぞこれ程の建築文化が根付いたものとの思いがした。しかし、村落の通りを歩くに従って、間近に見る村のたたずまいと、期待していた景観との間に、ある種の落差を感じずにはいられなかった。やはり他の“古い町”で見られるように、歴史を刻む合掌造りの木の風合とちらほら目に入る新建材との mismatch なのである。先日も、合掌造りの葺き替え工事をテレビで放映していた。働く村の人達の真剣な姿を見て、国は万全の策を講じて、この文化遺産を守るための努力をすべきだと痛感した。

太平洋戦争の最中、多くの都市が米軍機の爆撃によって焼失したが、京都が標的から外されたのは、我が国を代表する文化財を残すためであったと聞く。最近完成したJRの新京都駅は、そのデザイン決定を巡り、激しい景観論争が巻き起こったというが、それ以前に、京都タワーが建った時が、古都京都の一つの時代が終わり、新しい京都の始まりであったと私には思える。ヨーロッパの国々を代表する都市景観は一朝にして出来上がったものでないことは、歴史が物語っている。木造文化の維持に困難性はあるものの、京都の景観の移り変わりは気になるところである。

かつて、ナポリ大学に生化学の教授を訪ねた時のことである。当時、イタリアは深刻な経済危機に見舞われていて、リラの価値も下がっていた。雑談の折りに、それでもイタリアの若い人達は陽気で活気があるように見えるがと言ったのに対して、彼らも現実には深刻なんですよという言葉が返ってきた。別れ際、教授はやおら立ちあがり、研究室の一方の窓を開けて、下の通りを指さし

た。そこは大学の裏道のようなところで、自動車が一台通れる程の石畳の道に沿って古めかしい建物が両側に並んで建っていた。決してきれいな通りではなかったが、結構人通りも多く、賑わっていた。この道はローマ時代からのもので、少し掘り下げると、石に刻まれた昔の馬車の轍の跡が見つかるという。こんな街筋があちこちにあって、彼らはこういう街に愛着を持っているんですとの話であった。毎日、陽気に浮かれているように見える若者達でも、古き街角に抱く心情を伝えたかったのであろうと思った。

科学技術文明が成熟期に入り、我々の日常生活も何となく乾燥気味になってきた。“文化生活”を享受したければ、それと引き替えに生活環境を犠牲にする覚悟をしなければならない時代になった。私の家族がここ八事に住居を移してから20数年が経過した。その頃は、結構緑が多く、春の渡りの頃になると、早朝からいろいろな鳥の鳴き声のシャワーに悩まされるという贅沢(?)を満喫したが、7-8年前頃からの、周辺界隈の景観の変貌は驚く程の速さである。低層住宅指定地域であっても、区画の一部が幹線道路に面していれば、高層建築が許可されるとあって、あつという間に、道路沿いに様々なデザインの高層マンションが建ち並んでしまった。指定区域内だからといって安心もしておれず、制限ぎりぎりの3階建てマンションなるものが増え、その都度、パッチワーク状に緑が消え、鳥の声もめっきり減ってしまった。少し離れた所の幹線道路からの自動車の騒音が時々耳に届くようになってきた。所詮、我が国では景観保全どころか、環境保全なども机上の計画でしかないのであろうか。

緑が減るのは他人のせいばかりではなく、私もその責を免れ得ない一人である。エクスキューズにしかならないが、敷地の半分ほどを元からあった雑木林のままに残したのは、いささかの“自然の緑”への気配りのつもりである。おかげで、夏場半年程は、藪蚊の襲来に悩まされ続けている。そういえば、私が訪れた欧米の国々の街中で、蚊に刺された経験は皆無である。日本にはまだまだ自然が残っている証拠(?)なのである。4~5日前、庭の水撒きをしていた時、ブーンという蚊の羽音が耳許を掠めた。2000年紀の藪蚊第一号である。

(2000年5月記)

(名古屋大学名誉教授)